

knitr

宮崎

2014 年 1 月 12 日

Campbell and Mankiw (1990); 阿部 (2012); Breitung and Pesaran (2005) を参考にする。はじめに, 乱数を発生させ, 回帰を実施する。

結果を実行すると以下のとおりである。

```
result <- lm(従属変数 ~ 説明変数)
```

結果を表 1 にまとめられる。回帰係数は 2.0056 である。結果は図 1 にまとめられる

参考文献

Breitung, Joerg and M. Hashem Pesaran (2005) “Unit Roots and Cointegration in Panels,” CESifo Working Paper Series 1565, CESifo Group Munich.

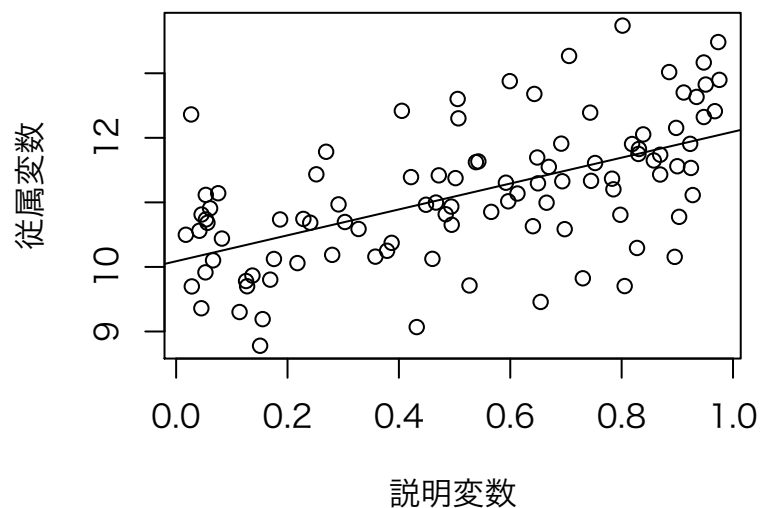
Campbell, John Y. and N. Gregory Mankiw (1990) “Consumption, Income, and Interest Rates: Reinterpreting the Time Series Evidence,” NBER Working Paper 2924, National Bureau of Economic Research, Inc.

阿部修人 (2012) 「近年の日本家計の消費・貯蓄行動と家計消費理論：リーマンショックと東日本大震災の影響

表 1 回帰結果表

	推定量	標準偏差	t 値	P 値
切片	10.088	0.172	58.656	0.000
説明変数	2.006	0.284	7.056	0.000

図 1 回帰結果図



響に関する一考察 (特集東日本大震災と家計行動)』、『個人金融』, 第 7 卷, 第 1 号, 2-11 頁, 2 月.